

# あえてゆっくり精読など

## —文学教育が役に立たないという意見へのささやかな反論—

新関 芳生

### はじめに

これから私が述べたいと思っていることは、英語教育論や教育法についてではなく、ましてや、英語の読解力をつけさせながら、同時に文学教育という本来の目的もおろそかにしないような授業の実践についてでもない。文学部や文学研究にとって非常に厳しいと言わざるを得ない現代にあって、「役に立たない」という先入観で学生たちがとらえがちな、英語で書かれた文学テキストを主体的に「読む」という活動へ彼らの関心を向けさせるための試みについてのささやかなご報告だと考えていただけたらと思っている。

題材として Erskine Caldwell の“The Strawberry Season”を取り上げてみよう。聞くところでは、過去にこの物語はかなりの数の教科書に採用されていたとのことなので、実際にこのテキストを使って英語の授業をなさった方々も多いだろう。あえてこのテキストを使うのは、英語の教材として用いられるものを、文学的な解釈の素材として「ずらす」ことで、同じ題材であっても、異なった様相を見せるのを感じていただきたいからだ。

### 1. 授業の根底にある方法論・理論

私自身の、文学教育に関する基本方針をまずお話ししておきたい。私が英米文学の作品を講読する際の理念は、大学院生の頃に出会った1冊の研究書に大きな影響を受けている。それは Robert Scholes 著 *Textual Power: Literary Theory and the Teaching of English* (邦訳『テキストの読み方と教え方』)である。Teaching of English とあるが、この場合は(英米)文学の意味であって、語学としての英語教育の本ではないことにご注意いただきたい。

Scholes はこの本の出版時、アメリカのブラウン大学の教授であり、フランスの批評理論の紹介を行ってきた中心人物のひとつであった。本書の中心と

なっているのは、さまざまな文学批評理論、特に記号論や構造主義が、どのようにして実際の英文学教育に応用されるべきか、という問題である。修士課程に入学したばかりの私にとって衝撃的だったのは、英文科の専門課程の授業で行われるべき講読は、単なる「訳読」ではないのだ、ということをごの本によって思い知らされたことであった。加えて、「名作」の権威や力の前にひれ伏すのではなく、これらの「テキストがもつ力」(Textual Power)を見極め、時には批判し、その力をわがものとして身につけることで、テキストのみならず、私たちを取り巻く世界そのものを解釈し、切り開く力とすべきだという本書の主張に目を開かされたのである。

20年も前のこうした Scholes の主張は、わが国の高等教育で軽視されて久しい「教養教育」を考え直し、再構築する上で重要な指針を与えてくれていると私は考えているのだが、その点については別の機会があれば改めて論ずることとし、以下では、実際に授業ではどのように「読む」のかをご説明したい。

### 2. “The Strawberry Season”を読む

私の授業では、市販の注釈つきのテキストは使わない。自分が使いやすいフォーマットで英語を打ち直し、注釈なしのプリントとしたものをあらかじめ学生たちに配付する。読み、文法力とともに、辞書を使いこなす力も著しく落ちてきているのは、英語教育の現場で先生方も感じていらっしゃるだろう。というよりも、特に電子辞書が主流となつてからは、辞書の使い方そのものがわからないままに大学に入ってきている場合が大半であるようだ。注釈がないテキストを使うことで、辞書の引き方だけではなく、その辞書が今後も大学で使えるものかどうかということも、授業で見極めるよう促すことができる。

語り手の男性が少年時代を回想して語る“The

Strawberry Season”のプロットは単純なものである。アメリカ南部とおぼしき田舎が舞台だ。イチゴ摘みの季節労働に携わる思春期の少年少女たちの間では、「イチゴつぶし」「strawberry-slapping」という悪戯が流行っている。男の子が、女の子の服の中にイチゴを入れて、服の上から叩き、イチゴを潰して赤いシミを服につけるというたわいない遊びだ。女の子たちの中でも Fanny Forbs だけは、そのような悪戯をされても決して怒らなかったで、男の子たちに人気があった。ある日、語り手は Fanny とふたりだけで小さな畑でイチゴ摘みをするという偶然に恵まれる。イチゴを摘み進めて行くうちに語り手はいつもの悪戯心が出て、Fanny に「イチゴつぶし」を仕掛け、服の上から彼女の乳房を叩いてしまう。予想外に痛がり、涙を浮かべる Fanny。それに驚き、慰めるうちに我を忘れて語り手は彼女にキスをする。やがて日は沈みかけ、ふたりは帰途につき、右と左に別れて帰宅する。それがイチゴ摘みの季節の終わりでもあった。

基本的に私の授業は、ひとりの学生を指名し、ある程度の長さのパスセージを日本語にしてみようというような、表面的には旧来の訳読式の授業である。だが、先を急いで少しでも「速読」に近づけるスタイルではなく、読んだ箇所からどれだけ解釈の可能性を絞り出せるか、それを学生に問いかけながら、着眼点、分析の基礎的な方法などを紹介していく「精読」である。今の英語教育の風潮にあっては、間違いなく「役に立たない」やり方だろう。いや、「役に立たせ方」が異なるだけなのだが、それを理解させることこそがこの授業の目的でもあるのだから、焦って役に立つ側面を追求しないようにしよう。

手始めに名前や印象や意味を学生たちに尋ねてみる。Fanny という名前はどのような意味をもつのだろうか？ この名前が、イギリス文学史においては重要な意味をもつことに触れてもよいだろう。通称“Fanny Hill”で知られる18世紀に書かれた、John Clelandの著名なポルノ小説 *Memoirs of a Woman of Pleasure* (1749) の主人公である娼婦の名が Fanny なのだ。15歳で両親と死に別れ、娼家に住むことになる彼女は、性的に奔放な人生を送る。そのような女性を連想させる名前であることがわかっただけで、すでにテキストには「ずれ」が生じ、生じた亀裂の背後に異なった物語がうごめいていること

が学生たちにもわかるはずだ。

紙面の都合もあるので、この物語の中で最も有名な場面、読んだ誰もが覚えているといってもよい場面を例として分析し、この裂け目をさらに開いてみたい。語り手が Fanny に「イチゴつぶし」をするセンテンス “I slapped her breasts” の “breasts” には、多くの学生たちが単に「胸」という日本語をあてる。もちろん複数形であることに注意がいけば、これが女性の乳房であることはすぐにわかるのだが、現在の英語教育における文法学習の短縮のせいかな、そのような注意がなかなか働かないようである。

ともかく、「胸」などではなく、英語の語感ではかなり露骨に「乳房」を語り手は叩いていることを理解させる必要がある。思春期の女の子の胸が膨らみ始める時の、その痛みについて学生たちに意識させるのも必要である（もちろんセクハラにならないように細心の注意を払いながらだが）。身体に覚える「成長の痛み」が、彼女の場合は「心の痛み」につながっていることを、特に女子学生は強く意識するようだ。一方で男子学生は、そのような痛みが生じることを知らない場合が多い。現実にも男女で生じるこのような違いそのものが、テキストの Fanny と語り手とのずれと共鳴しあっていることを理解させることは重要である。

聞くところでは、この物語は文部科学省の検定を通らなかったために教科書から削除されたとのことである。その際に挙げられていた、Fanny が「イチゴつぶし」をされても怒らない少女であることが、男性にとって都合のよい女性像を印象づけることになる、という理由は、高校生を対象とした場合は斟酌しなければならぬだろう。だが、ジェンダー的にかかるような読みの差異が生じるのは当然のことであり、大学においてはそれを問題視すべきではない。テキストのどのような表現、構造が、このような差異を生み出すのか、それ自体も解釈の対象だからだ。これまでフェミニズムやジェンダー・スタディーズが明らかにしてきた、文学テキストにおける女性の表象を説明するきっかけとしてもよいだろう。

Her head fell on my shoulder. I put my arms around her. She wiped the tears from her eyes.

“It’s all right now,” she repeated. “It will

stop hurting soon.”

She lifted her head and smiled at me. Her large round blue eyes were the shade of the sky when the sun has begun to rise.

Fannyの痛みもおさまりかけ、ふたりの距離が一気に縮まり、読んでいる私たちも胸が高鳴る場面だろう。ここで学生たちの目を向けさせたいのは、最後のセンテンスに表れているメタファーである。このテキストには、印象的な直喩、引喩があちこちに現れている。そのような表現をピックアップさせ、simileであれば、喩えられる対象との関連性について考えさせ、metaphorであれば、tenorとvehicleのつながりについて解釈させる。さらに、メタファー研究において近年大きな成果を挙げている認知文法を紹介することも必要だろう。例えばGeorge LakoffとMark Turnerの*More Than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor* (邦訳『詩と認知』)で提唱されているメタファーからの詩の読み方は、フィクションを解釈する際にも十分に役立つものである。認知文法は文学研究とかなりの親和性をもっており、メタファーの視点から言語と人間精神の働き方を解明しようとする、新しい「詩学」の構築にも並々ならぬ関心をもっているようである。これを文学の授業に利用しない手はない。

Fanny unbuttoned the dress down to her waist. [...] She unfastened the undergarment.

何のためらいもなく下着姿になり、さらにその下着さえも取ってしまって同年代の異性の前で胸をはだけさせるFannyに驚く学生も多い。このような唐突な行動は、彼女のどのような性格、心情の現れなのか？この地点で立ち止まり、学生たちと解釈をめぐるディスカッションをする。気をつけなければならないのは、おそらくは国語教育の弊害なのだと思うのだが、学生たちが思いつきによる「感想」を述べる傾向がある点だ。感想は否定してはいけないのだが、分析的な精読においては、テキスト内からの証拠をもとに解釈行為を行わせる必要がある。たとえ教員を含めて妥当性のある解釈にたどり着けなかったとしても(往々にしてあることだ)、常に実証的な姿勢を求めべきだろう。

Fannyの大胆な行動は、どこから説明するべきなのか。おそらくは、決定的な解釈を導き出すことはできず、どれも同程度の可能性がある解釈がいくつか並列されるのではないだろうか。それは、決してテキストの欠陥などではなく、むしろ文学研究でいうところの、“ambiguity”[曖昧性]が豊かであるという、すぐれた側面であることを説明する。最終的には自己の責任においてどれかひとつの解釈を選び取るにしても、その選択の背後には排除された他の可能性が常に存在し、依然としてその解釈に影響を与えていることを理解させるべきだ。中学、高校での教育は、このような「曖昧性」を好ましくないものになってしまう傾向があるのかもしれないし、そうした環境を経てきた学生たちも、答えや解釈をひとつに絞らない姿勢に、慣れないうちは疑問を感じるようだ。だが、多様性、多義性を認め、相対化する思考態度を身につける重要性は、この現代にあってもますます増加しているのではないだろうか。

The berry was mashed beneath her underclothes. The scarlet stain looked like a morning-glory against the white cloth.

Fannyの下着についているつぶれたイチゴの染みが、それまでの“red”ではなく“scarlet”となっていることに気づく。この1語は実に豊かな「相互テキスト」(intertext)への入り口となっている。この語から、Nathaniel Hawthorneの*The Scarlet Letter*の世界に積極的な脱線を試みよう。(あるいは*Gone with the Wind*のScarlett O'Haraを思い起こさせるかもしれない。これは“The Strawberry Season”よりも後の作品なのだが、女性キャラクターと“scarlet”という語が結びつけられると、アメリカ文学においては登場人物とその性格に関する何らかの類型化が生じることに、意識を向けさせるのも興味深い)。この小説の中で、ヒロインのHester Prynneが、私生児を産んだ罪の罰として身につけるのが、緋色のAの刺繍である。姦通(adultery)の頭文字を表すこの文字も、Fannyの緋色の染みも、どちらも「胸」についている。こうした共通性、あるいは相互テキスト性によって、Fannyの染みが何らかの「罪」の含意を帯びると読むのは外的ではないし、後に述べる解釈上の疑問に、ひとつの答えを与えるため

の根拠となりうる。仮に私は相互テキストの確認を「脱線」と表現したのだが、ここにはなんら否定的なニュアンスはない。「テキストの力」をわがものとするには、このような意図的な「脱線」を学生たちが主体的に行うことができるように促すことも重要なのだ。

また、ここにも直喩が現れていて、今度は染みのアサガオに喩えられている。朝の爽やかさ、ほんの一時だけ咲いてしぼんでしまうはかなさは、「罪」の色を喩えらるとなると、どのような効果をもつか。Hesterの、長く続いた罪とは異なり、Fannyの「染み」は東の間のものだというのだろうか。

They were milk-white and the center of each was stained like a mashed strawberry.

ここでは、白と赤の対比が鮮烈である。おそらくは見ている語り手が覚えるまぶしさをも表しているのだろう。ここに出てくる直喩では、乳首がつぶれたイチゴに喩えられる。語り手がFannyの服の中に入れてつぶしたイチゴは乳房の間にあるのだから、この場合では比喩的には3つのつぶれたイチゴが並んでいることになる。単にstrawberryではなく、mashed strawberryとなっていることに、学生の注意を向けさせたい。これよりも前に“*She never mashed a berry like some people were forever doing*”とあるように、Fannyは、成長の過程で痛みを伴う、自らの乳首への思いやりと通ずるかのように、摘み取る際にイチゴを決してつぶすこととはない。この短編のメタファーの次元では、イチゴと乳首とは同一視されているのだ。しかしここでは、語り手が描写する彼女の乳首は「つぶれた」イチゴに喩えられる。そして乳房の間には実際につぶれたイチゴ、すなわち、語り手がつぶし、それによってFannyに痛みを感じさせ、傷つけてしまったイチゴが貼りついている。彼女の、イチゴとわが身への細やかな繊細さが、語り手の何気ない悪戯によって壊されてしまったことを、こうした比喩の分析によって読み取ることができる。

Hardly knowing what I was doing I hugged her tightly in my arms and kissed her lips for a long time. The crushed strawberry fell to the

ground beside us.

When we got up, the sun was setting and the earth was becoming cool.

語り手がFannyを抱きしめる描写は、「イチゴつぶし」を彼女にやってしまった際の、彼女の反応である“*She sat down quickly, hugging herself tightly*”と呼応している。どちらも“*tightly*”という副詞が現れていることには注目すべきだろう。自分自身を「きつく」抱きしめるとは、自分の胸を防御する、相手を寄せつけない行為であるのに対し、彼がFannyを「きつく」抱きしめるのは、相手と一体化しようとする心情を表しており、同じ副詞が、正反対の状況を強調しているからだ。

抱きあうことでふたりの間に彼女の胸から落ちてしまうつぶれたイチゴは、何を意味するのだろうか？ 学生たちに尋ねる際には、もしこの場面で映画で描写された場合、最後にこのようなショットが挿入されていることには、どのような意味を観客は読み取るべきか、というような質問をしている。無論、これまで行ってきたこのイチゴに関する比喩の分析も踏まえるべきだ。彼女の繊細さを踏みじめることを意味していた、つぶれたイチゴがふたりの間に落ちることには、表面的な意味以上の含意があるはずである。

そのような含意を、かなり多くの人たちが意識しているのだと思われる。この短編を読んだ経験(多くは高校の英語の授業において)を語ったインターネット上のブログには、このセンテンスと次のセンテンス(パラグラフが変わった後)との間の、「意味深な時間経過」に注目し、この間に何が行われたのかを推測する内容のものがかなりある。平たく言えば、語り手とFannyの間に、キス以上の深い行為があったかどうかという解釈上の疑問である。“*got up*”には、座った状態から立ち上がったという意味と、寝ている状態から起き上がったという意味のどちらも指し示す「曖昧性」があるから、なおさら読者の解釈欲求を刺激するのだろう。幸い大学では、品が悪くならないように注意して(これは担当教員の品格に左右されるのだろうか)、こうした疑問点を授業で扱うことができるし、テキストで欠け落ちている部分を読者に補わせようとする働きも、テキストの重要な機能なのだから、むしろ私は積極的に学生たちをこの

議論に引き込む。ただ、作者が書いてはいないことなのだから、確定的な解釈にはたどり着くことはないのかもしれない。教育的な効用があるとすれば、客観的な分析と実証的な姿勢から自分の解釈を作り上げる方法を身につけさせることができるということになるだろうか。

私が授業で解釈を示すとすると、次のようになる。この場面では「赤」が強調されており、先に分析した比喩である、白いサテン地を背景としたアサガオや、乳房の白さに対立する乳首の赤といったように、特に「白」と対比するような強調のされ方だ。この赤は血の色を連想させる。一方、大人への成長のプロセスにおいて、女性には「血の通過儀礼」というべきフェイズがあるといってよい。つまり初潮と破瓜の出血である。さらに、前述した“scarlet”が含まれる「罪」、あるいは Fanny という名前が想起させる意味、そしてこのつぶれたイチゴが彼女の繊細で細やかな心遣いを踏みにじったもので、「白」を汚す (stain) ものであることを考え合わせると、ここには、より深い関係がほのめかされていると読んでもよいのではないか。もちろん、教師が述べたからといって、それが決定的な解釈ではないし、むしろ学生たちに *critical thinking* を行うように促すべきだ。そうすることで、「テキストの力」を自らのものとするようにできるものだから。

### おわりに：「ゆったりとカルチベートされた人間になれ！」

いささか長くて恐縮だが、太宰治の『正義と微笑』の一節を引用させていただきたい。

日常の生活に直接役に立たないような勉強こそ、将来、君たちの人格を完成させるのだ。何も自分の知識を誇る必要はない。勉強して、それから、けろりと忘れてもいいんだ。覚えるということが大事なのではなくて、大事なのは、カルチベートされるということなんだ。カルチュアというのは、公式や単語をたくさん暗記している事でなくて、心を広く持つという事なんだ。つまり、愛するという事を知る事だ。学生時代に不勉強だった人は、社会に出てからも、かならずむごいエゴイストだ。学問なんて、覚えると同時に忘れてしまってもいいものなんだ。けれども、全部忘れてしまっても、その勉強の訓練の

底に一つかみの砂金が残っているものだ。これだ。これが貴いのだ。勉強しなければいかん。そうして、その学問を、生活に無理に直接に役立てようとあせってはいかん。ゆったりと、真にカルチベートされた人間になれ！

これはこの日で学校を去る若い英語教師が生徒たちに語る言葉である。この先生ははっきりとは語っていないが、ご存知のように、“culture” も “cultivate” も「耕す」概念を語源にもつ語であり、上の引用を *etymological* にパラフレーズするならば、若いうちに精神に肥料を与え、時間をかけて耕しておかなければ、健全な作物は育たない、ということになるだろうか。

『正義と微笑』の時代設定は、第二次世界大戦の直前の暗い時期とされている。小説中で語り手も述べているように、この先生は徴兵されたかもしれないし、教え子たちも戦地に赴いたのかもしれない。幸いなことに私たちは、教え子を今のところは戦場に送らなくてもよい時代に教師をやっているが、別の意味での戦争、すなわち、経済効率から生存の適否がはかれる競争に、生徒、学生たちを送り込まなくてはならない。このような拝金主義が至上である時代、また、急激な変化のスピードに常についていかなければならない社会にあって、「学問を、生活に無理に直接に役立てようとあせってはいかん。ゆったりと、真にカルチベートされた人間になれ！」と、私たちは自信をもって生徒や学生たちに語るることができるのだろうか。

奇妙なことに、グローバリズムという新たな形の経済的覇権主義を全世界に仕掛け、効率優先の権化と化している観があるアメリカのほうが、太宰の語る言葉がびったりとあてはまる。例えば、リベラル・アーツをカリキュラムの中心に据える多くのアメリカの大学においてはそれが顕著であろう。18、9歳で大学に入った時点では、正しい人生の選択はまだできない。だからこそ、その選択そのものを可能にする広範囲な知の力、「教養」(リベラル・アーツ)を学生たちにたたき込む。彼らは大学の4年間、膨大な読書とレポート、リサーチ、プレゼンテーションを多様な授業においてこなしながら、自らの適性を見据えていく。「役に立つ」学問の体系は、学部を卒業後に様々な専門職大学院にさらに進学することで身

につけ、その分野のエキスパートとなるのがアメリカの考え方である。「実学」と「非実学」の棲み分けがアメリカではできており、前者は後者の基盤の上に成立するという意識が強い。専門職大学院は授業料が高いから、彼らは大学卒業後にとりあえずの仕事を作りながら、こつこつと授業料を貯めるし、中年近くになってからようやく大学院に入る人も多いはずだ。ひとりの有能な専門職業人を作るには、それだけの時間がかかるものなのであり、そうでなければならないという考え方がアメリカにはある。無論その一方で、才気あふれる若い才能に早いうちから可能性を見だし、開花させる仕組みも整えられており、均衡が保たれている。

このようなアメリカにおいてでさえも、Scholesが*Textual Power*を執筆した20年ほど前は、文学教育が形骸化し、ある意味では危機に瀕していたのだ。Scholesは次のように述べている。

われわれが今学生たちに(中略)与えることのできるものはなんだろうか。それは、彼らが自分たちの世界を了解し、個人としてまた集団の属性としてもっている利害を知り、あらゆる種類のメディアのあらゆる種類のテキストが行っている操作を見抜き、自分の見解を適切に表現するための、知識と技能である。(中略)現代は操作の時代で、学生たちはあらゆるマス・コミュニケーション手段によってひっきりなしに攻撃されており、それに抵抗するためには強い批評的能力が切実に要求される。こうした時代においてわれわれのなしうる最悪のことは、学生たちの中にテキストを崇拜する態度を養うことだ。(中略)今必要なのは慎重な態度、分かったと思うまえによくよく考え、何か見落としやすい点や、人には分らないように話題にされていることはないかと目を光らせる態度、結局批評的であり、つねに問うことをやめず、懐疑的な態度である。(『テキストの読み方と教え方』pp. 28-29)

私がお示しした授業例は、このようなScholesの提起に裏打ちされているものだといってよい。「思春期の、甘酸っぱくはかない恋の思い出」と評価されがちな“The Strawberry Season”から、一見すると猥雑ともいふべき側面を引きずり出し、テキストの読み全体を変えようと試みる姿勢に対し、テクス

トが蹂躪されていると眉をひそめてしまう人があるのかもしれない。だが、そうした嫌悪のどこかには、「テキストを崇拜する態度」、名作であることをそのまま受け入れてしまい、主体的に疑おうとはしない意識が潜んでいるのではないか。私が示したようにテキストを分析的に精読し、新たな意味構築の可能性を示したところで、確かにそれは直接実生活には役に立たないのだろうが、このささやかなテキストを批評的に読む姿勢や訓練は、「人には分らないように話題にされていることはないかと目を光らせる態度」や「つねに問うことをやめず、懐疑的な態度」へとつながってくるものである。権威を批判することでまやかしをあばいたり、見過ごされそうな、ささやかだけでも大切なことに注意を向ける姿勢、言い換えれば、文学テキストから目を転じてこの世界という大きなテキストを解釈する基礎となるものだ。太宰が言うように、「学問なんて、覚えると同時に忘れてしまっていていい」。だが「その勉強の訓練の底に一つかみの砂金が残っているもの」であるべきだ。私たち大学の英文科の教員も、功利的に先走る学生たちの、ひいては社会の意識や価値観を揺るがすことで、「実学」と「非実学」という表層的な対立を脱構築し、健全な知の力を体得させるために試行錯誤していこう。そして太宰の言う「ゆったり、真にカルチベートされた人間」を世の中に送り出すべく、文学の力を通して心に良質の「肥料」を与え「耕す」よう、学生たちを上手に促していくことにしよう。

#### 参考文献

- Scholes, Robert. *Textual Power: Literary Theory and the Teaching of English* New Haven: Yale UP, 1987. (『テキストの読み方と教え方—ヘミングウェイ・SF・現代思想』折島正司訳 岩波書店)
- Lakoff, George and Turner, Mark. *More Than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor* Chicago: U of Chicago P, 1989. (『詩と認知』大堀俊夫訳 紀伊国屋書店)

“The Strawberry Season”は、*The Stories of Erskine Caldwell* Athens GA: U of Georgia P, 1996を定本とした。